

国産榊生産者の会 in伊万里

生産者と販売者が情報交換



奥山完己氏

▶10月19日
(佐賀県伊万里市)

国産榊生産者の会in伊万里が10月19日、佐賀県伊万里市で開かれ、全国各地から榊の生産者や農協、卸売業、流通、生花店、行政、関連産業など約130人が参加した。同会は、国内流通量の大半を占める中国産の榊を国産に切り替えようと志した八丈島の奥山完己氏が2010年に有志と設立した組織である。イベントは、榊経営の向上を目指す趣旨で毎年催されており、今回で8回目を迎えた。当日は、前半に情報交換会、後半に生産現場の視察会が行なわれた。

高品質化と安定供給とどう課題と対策を共有

イベントの特徴は、生産者の栽培技術の情報交換にとどまらず、販売者が参加して市場状況やニーズの情報交換をしていることである。今回も、両者から情報や課題が提示され、今後、国産榊が目指すべき方向が共有された。

生産者は、鹿児島、宮崎、熊本、佐賀、長崎、和歌山、静岡、茨城、栃木、東京（八丈島）を合わせた計24の団体、法人、個人が参加した。世代は20〜80代と幅広く、新規就農者からシキミ生産者、林業者、山採り（注：山に自生する榊の採取）を生業としてきた人まで、さまざまな経験を持つ生産者が集った。

生産者からは、榊を始めた理由や品種、苗か挿し木かの選択の理由、品質の良い枝の剪定が重要であること、防除方法、出荷先、課題などが報告された。榊を始めた理由としては、中山間地域の高齢化が進むなか、定植が一度で済むことや、体力が必要な山採りからの切り替え、耕作放棄地を解消できることなどを理由に、榊の生産を始めたということが発表された。また、課題として、品質に影響を及ぼすルビローウムの防除や、通年の安定出荷や作業の平準化のための冷蔵庫の導入などが挙げられた。

販売者は各地の花市場や流通業、生花店など計10軒の企業が参加し、各地の国産榊の需要や要望についての情報が提供された。

冒頭で、(株)フロリスト・コロナの高橋正行氏より、中国産榊の生産状況について説明があった。同氏によると、中国の人件費高騰で低価格の榊供給は限界にきている一方、山採りから栽培に切り替えることで品質が上がってきていることや、国産榊が売れる価格帯などが提示された。

各販売者からは、地域ごとに異なる国産榊のニーズや生産者への要望が発表された。八丈榊のような品質の高い国産榊の需要が高まっている

ことが報告された。一方、数が慢性的に不足していることや、生花店に欠かせない商品なだけに、欠品時期は中国産で補填されるという機会ロスが国産榊普及の課題として挙げられた。そこで、生産者への要望として、冷蔵庫の導入による安定供給が提案された。

そのほか、東北や九州では45〜80cmまでの長い枝が好まれ、関東以西では40cm以下の短い枝が好まれる傾向にあることや、地域ごとのシキミとホンサカキ、ヒサカキなど品種ごとのニーズ、東ね方のコツなど、出荷時の注意点なども伝えられた。また、神棚の販売会社から住宅事情の変化で最近では都市部の神棚が小型化しているため、それに合った短い榊の供給が必要だという指摘があっ



大会の様子

た。

生産者からは、「生産するだけでは売れないとわかった。出荷形態をどんどん教えてほしい」という声が聞かれた。休憩時間や懇親会では両者の間でさらに詳細な情報のやりとりがあった。

今年も、九州各地の農業・林業の行政担当者も参加し、今後、バックアップ体制を取っていくことを発表された。行政は、中山間地域の産業振興や里山の遊休地の利活用、林業者や山林所有者の所得向上のために柿の生産に注目している。また、昨年からは農林水産省も参加している。同省生産局農産部花き産業・施設園芸振興室の橋本泰治氏より、柿単独の予算確保は難しいものの、来年度も「国産花きイノベーション事業」の予算増額が予定されていること、また統計上、国産柿は10年737t、16年に1091tと増加していると報告があった。

作業負担軽減やコスト低減を視野に

視察会では、伊万里柿タカハラ緑地で柿栽培の様子を見学した。現地視察を前に、高原六宏氏より、柿の魅力と生産の注意点が語られた。同氏によると、柿の魅力は施設栽培の花きに比べ低コストで作業の平準化

ができることであるという。露地栽培なので加温のエネルギーがかからない。また、周年出荷が可能で、収穫と束ねる作業を定期的に行なうことができる。加えて、一度の定植で済むことや、大きく成長しても切り戻して収穫できることも利点として挙げられた。

同氏は、作業負担軽減やコスト低減の考え方も紹介した。たとえば、定植から1年目までは化学肥料を使用しているが、2年目からは養豚業者から提供された堆肥を使用することでコスト低減を図っている。また、高品質な商品を目指すことが結果的に作業負担を軽減することも説明した。病害虫が発生すると、出荷作業時に葉や枝を落とす手間がかかるため、農薬散布や除草を定期的に行なうことも必要だということである。

重労働の農薬散布については丸山製のステレオスプレーヤーを導入している。

作業を軽減するため、電動の剪定ハサミや傾斜地でも操作しやすい草刈り機、ステレオスプレーヤー、自動タイマー式の点滴灌漑設備なども紹介され、視察会場で一部実演も行

なわれた。柿の圃場は中山間地が多く、生産者のなかには高齢者も多い。視察現場では、高齢になっても生産を続けられるよう作業負担を軽くするための圃場づくりや機械導入について、地域ごとに意見を交わす生産者たちの姿が見られた。（平井ゆか）



伊万里柿タカハラ緑地の視察会



生産者が持ち寄った柿を見ながら情報交換をする参加者たち



小型化する神棚と柿



伊万里タカハラ緑地で説明する高原六宏氏（中央）



草刈り機の実演



農薬散布機の実演